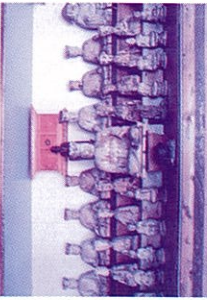


① 拾遺 第53話 会下の十王堂



古ぼけた仏像を子供たちが馬に連れて遊んでいるのを、近所の者が叱り

とぼして堂内に納めた。するとこの男はその喉から熱を出して病んだ。十五様が枕神に立ち、せっかく自分も子供らと面白く遊んでいたのにと叱った。巫女を頼んで、これからは気をつけませすという約束で許された。

② 拾遺 第225話 ゴンボ



をしようと言とうと、侍は心得たと木刀を取り出した。百姓の治吉は敵いにまかせて暴言をはいただけだったが、相手の物々しい様子に驚きしたものの成り行きから試合することになった。武芸者は逆に治吉の様子に驚き酒を5升買ひ、差出すとこそそと逃げ去った。その後、天高く、顔形の悪い、土淵村の治吉ゴンボという男が市日に町の建屋で酒を飲んでた。そこへ気仙から来たという武芸者が下駄をひとり連れて入ってきた。治吉は悔こそはこの郷まで武芸者なので試合

③ 物語 第27話 池端の石白



中腹の沼に行つて、手を叩けば宛名の主に会えるという。その後、一人の六部に運ひ、その話をすると手紙を開き、このままでは災いがあるとのこと書換えてもらひ、それを沼の主に渡した。その礼に買った石白は一粒米を入ると黄金が出てきて、その家は裕福になっていったという。今の池端の先祖の話である。

④ その他の話 宇迦神社(ウナンサンサマ)



由来は不明だが、宝永2年(1705)以前にはこの地にお堂があった。ウナンサンサマは、水とウナギにまつわる信仰で、かつて境内には湧水があり、神のお使いの片目のウナギがいたそう。そのため、ウナンサンサマの氏子は、鱈を食べないといわれている。境内には、かつて一里塚があったことを示す石碑も残っている。

遠野まち物語

散策マップ

「町の中には沢山の物語があります。マップ」
「片手に物語の世界に浸ってみませんか。」



物語：遠野物語
拾遺：遠野物語拾遺
その他の話：現在の伝承
その他の話

○印に数字は物語のあった場所です。 ■：電柱施設 円：神社 社：仏閣

⑤ その他の話 ツバサミ



一日市に仙台屋という駄菓子屋がある。その店の前を走って通ることを「ツバサミ」を取って走るという。それは、着物の裾を裾の後ろに挟み、おかつひきスタイルで走る様をいひ、おもしろい物を前にして、見ぬふりをして走り去るのは無粋で愛憎も素気もないことの列挙として、そう言う。

⑥ 拾遺 第98話 万吉米屋



天狗と知り合った。この天狗は羽黒や早池峰などの山々を往来しているが遠野の町に知り合いがないというので年々、3回この米屋に来ては酒を飲んで泊まるようになり、その節度、若干の文藝を置いていったが、最後の年に形見だといって天狗の衣を置いていったという。天狗の形見は、現在博物館に展示されている。

⑦ その他の話 座敷わらし



昭和8、9年頃のこと。驟に煙る朝、一日市の村繰醤油屋から福助頭の男女二人の子供が通り向かいの麹屋へ行つたのを、隣の店で働いていた正部家某が見たという。その後、手広く商売していた村繰はなくなり、

⑧ 拾遺 第93話 鳴り釜



小1時間も鳴っていた。驚いて近くの人が見に行くほどだった。それで、山名という画工を頼んで釜の唄とている所を書いてもらひ、釜鳴神として祀ることにしたという。鳴り釜(複製)はとおの物語の館に展示してある。

⑨ 拾遺 第63話 火消し仏像



ると、二人の子供が樹の枝を這つて屋根に昇つてしきりに火を消しているうちに、おいおい真火した。後で、その話を聞いた住職が本堂の中に入れて昇ると二つの仏像が黒く焦っていた。それは不動と大日如来で名のあある仏師の作であつたといふ。

⑩ その他の話 夜泣き鼓



鼓がなくなつた。それは、東京の趣味の方のもとへいったが、鼓が每晚泣いて仕方がないといふことで、鼓を見るときと裏側南面はやしの銘があり、里側りさせると夜泣きが止んだといふ。それからはやしの先立としての赤いすきで今も活躍するのが夜泣き鼓である。昭和30年代の出来事とのこと。

17 拾遺 第192話 石こ鐵治

六日町の鐵治屋松本三右衛門といふ人の家では、夜になるとどこからともなく石が墜つてきて評判になった。元町の小笠原の家の赤犬が尻尾から2本に岐かれた古狐を捕らえてからは、止んだという。今でもこの家のことを石こ鐵治と呼ぶ。



18 拾遺 第194話 外川のきつね

るので、そんな下駄はいらないが、大きな筆だつたらなあと言つたら、下駄が見事な筆になつたという。次にこの筆で画が書ければなあといふと、さつさと去つていったという。また、ある朝、ここを通ると社の前の老松が立派な筆になつていったという。この神社の烏居脇に松の古木があったが、時おり、お姫様に化けた狐がゑんて来たと言ひ、魚をよこせと言つた。そこでその手の塩を口に含んだ。その次にここを通ると山の上で塩へしり塩へしりと狐が言つていたという。



外川某の祖父は、弓を仕候といつて画をよく描く老人であつた。敏歩が好きて、ある朝、多賀神社の前を通ると下駄が落ちていた。老人は、ここに悪い狐がいることを知つてい

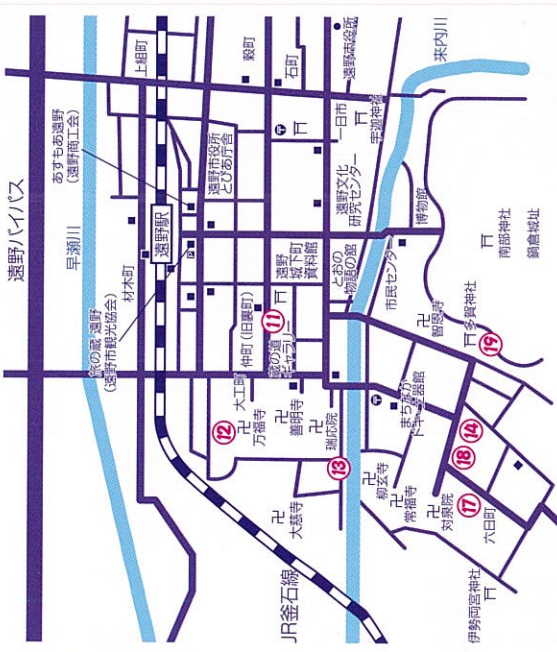
19 拾遺 第193話 多賀のきつね

いつも騙される織織の某がある時、塩を手につかんで通ると家で留守番をしているのはその婆様が、あまり遅いので迎えに来たと言ひ、魚をよこせと言つた。そこでその手の塩を口に含んだ。その次にここを通ると山の上で塩へしり塩へしりと狐が言つていたという。



多賀神社に狐が住んでおり、市日に魚を買つて帰る人をよく騙した。

遠野物語が生まれたこの町には、今でもたくさんのお話が息づいています。夕暮れ時や早朝のひととき、物語が生まれたその場所に足を運んでみませんか。座敷わらしやきつねなどに会おうかもれませんよ。



● 印に数字は物語のあった場所です。 ■: 神社 卍: 仏閣
 物語: 遠野物語 遠野物語拾遺 遠野物語拾遺 遠野物語拾遺
 その他: 現在の巨承

16 拾遺 第35話 卯子酉様



愛宕山の下に、卯子酉様の祠がある。昔は、ここが大きな淵で、その淵の主に願をかけると、不思議に男女の縁が結ばれるといふ言い伝えがある。

11 拾遺 第188話 欠ノ稲荷

安政の頃、裏町に木下彌石という医者があつた。ある遊田家の使いの者が来て、急病人がたから来てくれという。早速行って、診て薬を置いて帰ろうとすると家の老人が今晩の斷腸だと言つて一封の金を渡した。

12 拾遺 第152話 よみがえり



たら、その子がよちよち歩いて来たので不思議に思い、早く家に行くとついで帰した。あまりに気がかかるとので子供の家に行くこと先刻息をひきとつたが、今、生き返つたところだといつて大騒ぎの最中だつたといふ。

裏町のある家の子供が死にきれた時のこと。この子を可愛がつていた某が万福寺の墓地で掃除をしてい

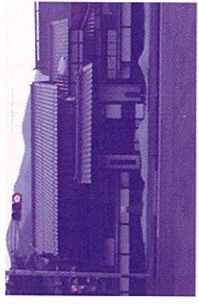
13 拾遺 第137話 幽霊銭



ていけと言う。手に取ると何か小重たい物で、家に帰つてあけて見ると多量のお金が入つていて、貧乏だったのがお金に裕福になつたといふ。一文でも残しておくこと、そのお金は、一夜のうちに元通りになつていたといふ。

遠野の町の某が、夜、寺ばかりある町の墓地を通つていくと、つい先頃死んだ女が歩いてきて、これを持つ

14 拾遺 第88・110・136話 村兵屋敷



村兵の先祖は貧しかつたが、愛宕山の鶏ヶ坂で「背負つていけ」とう一体の仏像に出会い、それを愛宕山に祀つてからは、めきめきと富貴になつたといふ。また、この家の別家の女房が畑に胡瓜を取りに行き、神隠しにあつたからには胡瓜を作らぬといふ。

15 拾遺 第64話 愛宕様



ある時、果家が失火があつた時、神明の大徳院の和尚が出てきて町内の者が来る前に火を消した。翌朝、失火元の家で礼に行くとき寺では誰も知らなかつた。それで愛宕様が助けにきたとわかつたといふ。